
発展学習01-2

行動の定義：形態的類似性による定義と機能的定義

1.4.のところで「行動を暫定的にどう定義するか」という話題を取り上げました。暫定的な定義の基本は、

- ・一生に一度、一期一会としての行動ではなく、繰り返される行動を対象とする。
- ・「同じ行動」と「違う行動」を区別する基準を明確にすること。
- ・「同じ」、「違う」というのは分析者のニーズによっても変わってくる。
- ・行動の増減の原因を探るためには、当然、その行動は量的に測定されなければならない。
(但し、場合によってはその行動の質的变化を測定することもある。)

といった点にあります。

しかし、もう1つ、全く別の見方として、行動の形態的類似性に基づいて定義するか、機能的に定義するかという議論があります。

行動の形態的類似性というのは、同じ動きをしているように見えていること、同じ筋肉系が関与していることなどを基準とするもので、英語では「topography」という言葉が使われており、日本語でも「トポグラフィ」というカタカナで表記されることがあります。念のためランダムハウス英語辞典で「topography」を調べると、

- ・【1】(比較的小地域の詳細な)地勢図,地形図;地形学;地形図作製術.
- ・【2】(測量に基づいた,市町村などの)詳細な地図,地誌;地形測量.
- ・【3】地勢,地形.
- ・【4】ある機構の全体的な様相[特徴,関係];(各部門と他の部門との関係などを示す)機構の図式的概要,機構の輪郭.
- ・【5】解剖 局所解剖学(regional anatomy).

といった意味が表示されますが、ピッタリした訳語が見当たらないため、ここでは意識として「形態的類似性」としておきます。

野生動物の行動や人間の日常生活行動を観察する時には、まずは、よく似た反応をカテゴリー分けして、頻度や生起系列を記録していきます。そういう意味では、形態的類似性に基づく定義は、行動観察の出発点と言ってもよいでしょう。

第2章で説明する「レスポナント行動」はおおむね、形態的類似性で定義可能であり、行動の型が決まっています(例えば、くしゃみ、あくび、しゃっくり、咳など)。また動物行動学(行動生物学)でもどういう型がどういう順序で生起するのかが重視されます。

いっぽう、同じく第2章で説明する「オペラント行動」の場合は、形は全く別でも、環境に対して同じように機能している行動をひとまとまりに扱う場合があります。これを「機能的定義」と言います。

Barnes-Holmes & Barnes-Holmes (2000)は、機能的定義の特徴について以下のように述べています【下線は長谷川による】。

Operant response classes are defined by their functions and not by their topography or form. Consider, for example, the rat's lever press. The rat may press the lever with its nose, left paw, right paw, tail, and so forth. Such responses appear different in form, but they are all lever presses and count as members of the same operant response class because they all share a common function (i.e., they all produce the same consequences). Contingencies select the members of operant classes and make all of the members of the class functionally equivalent. This functional equivalence, in effect, defines operant classes.

要するに、機能的定義では、ラットがレバーを鼻先で押しても、左前足で押しても、右前足で押しても、シッポで押しても、レバーを押すという機能は同一であり、同じ行動（正式には「オペラントクラス（反応クラス）」として定義するという考え方です。コンピュータの操作で言えば、「文字を入力する」という行動は、キーボードを叩いても、マウスでクリックしても、タッチパネルで手書き入力しても、あるいは音声で入力しても、同じ行動として定義されるということになります。

行動分析学は原則的には機能主義の立場を貫いており、じっさい、Skinner(1957)の言語行動理論では、言語行動は、「マンド (mand)」、「エコーイック (echoic)」、「テクスチュアル (textual)」、「書き写し (transcription)」、「書き取り (dictation)」、「イントラバーバル (intraverbal)」、「タクト (tact)」、「オートクリティック (autoclitic)」、というようにすべて機能的に分類されています。同じ「水」という発声でも、「水をください」という意味で機能すれば「マンド」、「そこに水があります」という第三者への報告として機能すれば「タクト」、日本語学習者が「水」という発音を学ぶ時は、エコーイックとして機能しており、それぞれ別の行動になります。

もっとも、だからと言って、形態的類似性が全く無視されるわけではありません。いま上に挙げた「水」の例においても、日本語学習者の「mizu」という発音をより日本語らしい発音に近づける訓練や、ひらがなの「みず」や漢字の「水」の書き取り訓練においては、形態的な特徴に基づいて分化強化が行われています。また、スポーツでよりよいフォームを形成する訓練、楽器の演奏、車の運転なども、最終的にはうまく機能することが求められるとはいえ、途中のプロセスでは形態的特徴を詳細に分析しなければ上達はあり得ません。

なお、行動の定義をめぐっては、以上に加えて、ボームの巨視的行動主義やラクリンの目的的行動主義から新たな視点が提供されています。また長谷川自身も、複数の行動がひとまとまりとなって一定期間継続する場合の包括的ラベルとして「活動」概念を提唱しています。しかし、これらについては、入門で取り扱うレベルを越えますので、第9章の中で、参考情報として紹介させていただくことにする予定です。

引用文献

Barnes-Holmes, D., & Barnes-Holmes, Y. (2000). Explaining complex behavior: Two perspectives on the concept of generalized operant classes. *The Psychological Record*, 50, 251-265.

Skinner, B. F. (1957). *Verbal behavior*. New York: Crofts-Century-Crofts.